研究プロジェクト

モノと感覚・価値に関する基盤研究

大西宏志（京都造形芸術大学准教授）

■「モノ」の向こう側にあるニュアンス

私たち日本人が「モノ」と言ったときには、「もののけ」、「もののあはれ」、「ものがたり」というように、その「モノ」の向こう側に、何かの存在、他者とのつながりといった、物質以上のニュアンスを感じ取ることができる。2006年度～2009年度、京都大学こころの未来研究センター鎌田東二教授によって、「モノ学の構築――もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」をテーマとする研究会（モノ学・感覚価値研究会）が発足、運営され、宗教学、美学、比較文化論、認知科学、そして芸術の実践など、領域を越えた活動が行われた。2010年度、本研究プロジェクトでは、この研究会の流れを汲みながら、人間がモノから何かを感じるという性質が何によって実現されているのか、「言葉」という視点から議論を行う研究会と、モノをテーマにした展覧会「物気色」およびシンポジウムを実施した。

■シンポジウム「言葉の感覚・価値――その韻律、質感、視点から」

研究会の主要な発表としては、2010年11月26日「言葉の感覚・価値――その韻律、質感、視点から」と題するシンポジウムを京都大学こころの未来研究センターで行った。本シンポジウムでは、モノのカテゴリ化やその価値の感覚と深く関連する「言葉」をテーマとし、「モノを作る立場」の作家（詩人）と「人間を分析する立場」の感覚や言語の研究者が、人間のモノに対する認識や、感覚・価値における言葉の役割を分野横断的に議論した。具体的には、松井茂氏（東京藝術大学、詩人）には「口ずさめる詩とは何か――声を共有する試み」と題し、意味を明示的には持たない言葉によって書かれた詩、およびその詩を発声することで生じる個人個人の身体感覚とその記号接地に関する試みについて、また、渡邊淳司研究員（日本学術振興会／NTTコミュニケーション科学基礎研究所）には「オノマトペを利用した触り心地の分類」と題し、触覚のオノマトペとその音声の関係を利用したワークショップについて紹介いただいた。そして、高嶋由布子氏（京都市立芸術大学、認知言語学）には「五感を捉えることばの視点」と題し、五感の知覚動詞の持つ視点の身体性や主観との関連について、鈴木清重氏（立教大学、知覚心理学）には「事象の知覚体制化と映像表現の技法」という題目で、言説や画像系列の組み合わせによって生じる印象の変化について講演いただいた。本シンポジウムによって、言葉が持つ発声の音響的な作用や、視点の操作に関する新たな視座がもたらされた。

■展覧会「物気色」

展覧会「物気色」では、京都市内にある築120年の日本家屋（京都家庭女学院・虚白院）を会場にして18名の作家が作品を展示。これまで現代美術が扱ってこなかったモノや気配の現出が試みられた。また、鎌田東二教授と河村博重能楽師による能舞「虹鬼伝説」も実施し、日本の古典芸能が持つ生態智を今日的な形で提示した。さらに、こころ観＋ワザ学合同研究会として「民藝と物気色アート」と題したシンポジウムを、志村ふくみ氏（染織家、人間国宝）、鞍田崇氏（総合地球環境学研究所）、近藤高弘研究員（造形作家）、武田好史氏（アートプロデュース）、大西宏志研究員（京都造形芸術大学、映像）らによって実施した。志村氏の基調講演では、無我・無名を重視する民藝運動と既に身についてしまった近代的な自我との葛藤が語られ、続くシンポジウムでは自我の現れとしての近代芸術を乗り越えるものとして、物気色のアートの可能性について討議された。

これらの成果は、新たな研究・実践分野の萌芽となるとともに、既存の研究・実践をより広い視点から相対化することに繋がる。

能舞「虹鬼伝説」シテ：河村博童、音楽：鎌田東二（撮影：佐藤鷹政）